

『変わりゆく風景』



生まれ故郷は、千葉の海辺である。今では訪ねる親戚も知人もおらず、足を向ける理由はなくなった。だいぶ以前に、祖母の法要で墓参りしたのが最後だった。その時でさえ、十数年ぶりに訪れた故郷は、すっかり様変わりしていた。

バスの通る道は、見違えるほど幅が広く真つすべな道路になっていた。海まで歩く途中にあった八百屋もかき氷屋も豚小屋も田んぼも、すべてなくなっていた。そして豚の匂いだけでなく海辺特有の強い潮の匂いまでもが消えていた。それらに替わってあったのは、ホテル、テニスコート、プールといったレジャー施設。少し離れた所には、海産物や地物野菜の豊富さで有名ならしい、大きな「道の駅」が造られていた。

愕然とした。記憶の中にある故郷の風景は一変していた。真夏の光を白く撥ね返していた砂の道は、どこもアスファルトが敷かれ、自転車で走った横の生垣が続く小道は、ブロック塀に囲まれていた。子どもの頃、祖母と墓参りにゆくと、いくつもの土まんじゅうを(と)いって、どこも砂地の土地ゆえ、実際には砂を小山に盛り上げた「砂まんじゅう」だが、これは誰の墓だと教えてくれながら、祖母はひとつひとつきれいに小山を盛り上げ直した。古い墓は、木の墓標も朽ちて砂の山だけが残る。知る人がいる間は、その人の手で小山は作り直されるが、時間がさらに経てば、知る人もなく風雨とともに消えてゆくものだったのだろう。その墓地も土まんじゅうや木の墓標に替わり、りっぱな墓石が並ぶ霊園になっていた。

十数年ぶりの訪問ともなれば、一変した風景にキツネにつままれたような気分になるのも仕方ない。ここまでの変貌を遂げるには、十数年の過程があったのだ。田畑を耕し、地曳網の上がる合図の鐘が鳴ると海辺に出て魚を拾つ、そんな暮らしがりの地域だったが、今では商業・観光が主な産業となった。故郷はますます遠くなった。

今住むこの村に目を戻してみよう。

この二年ほどの間に、わが通勤路はどんどん景色を変えた。大規模工事が始まると大量の電気が必要とされ、道路と並行して走る電線が、これまでより太いものに張り替えられた。それに伴って電柱も立て替えられ、より高く太くなり、本数も増えた。そのため木が伐採された。続いて道路の拡幅工事のために、さらに木が伐採された。

春になって、やけにスカスカになった木立を見ながら気がつくのは、あれっ、この辺にキブシがあったはずだが…、そつえばあの山桜は…と、芽吹きが山が前よりさみしくなっていることだ。晩秋になると、カラマツのふわふわと優しく降つてくる落葉を見るのが楽しみだった場所があったが、それも昨年は見られなくなっていた。そのカラマツは悉く伐られてしまった。

松の木が何本も伐られた辺りには、よくリスが実を食べに出没していたものだが、その姿を見る機会はめっきり減った。拡幅工事の終わったある箇所には、夏になるとよくヘビが出てきて、時には無惨に轢かれた姿をさらしていたが、道路下は垂直のコンクリート壁になり、木陰もなくなり、ヘビが出る幕はなくなった。シカ、サル、などとよく遭遇し、時にはクマまで見かけた場所は、道路とケモノ道の交差点だった。そこには工事の足場が組まれ、小さなプレハブまで建てられたせいかわ、ケモノとの遭遇はまったくなくなった。その近くには立派なサンショウの木があって、摘みに来る人もいたが、そこにはサンショウの木の代わりに鉄のパイプが立っている。

最近、館の近くで架橋工事があり、館の前を車が頻繁に往來していた。そつなると、どことなく埃っぽくなる。アスファルトの上に砂利が散らばり、自然の色も冴えなくなる。工事の村は、こんなふうには薄汚れていくのだ。これまで視界にはなかったもの、「二事申」と書かれた黄色やオレンジの看板、黄緑色のフェンス、枯野の中のブルーシート、白とオレンジの縞模様の三角コーン、そんなものばかりがやたらと目につく。

ああ、景色とはこんなふうに変わってゆくのだと実感している。たった二年でこんなふうに変わるなら、十年後はどうなっているのだろうか。

村に縁のある映画監督が、かつて大鹿村をこんなふうに表示したことがあった。周回遅れで走るランナーが、あたかもトップを走っているように見えることがある。その周回遅れのトップランナーが大鹿村だ。先頭を走る集団がコースを間違えて走り続けても、わが道を独走してきたと言えるかもしれない。それが、今や周回遅れのランナーではなく、遙か前を走る集団の末尾に追いつき、見えるのは前の走者の背中だけで、どうにもゴールの見えないコースに入りこんでしまったように思えてならない。さて、十年後の村はどこをこんなふうには走っているのだろうか。